わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70

湯島：1971－93

和光：1994－

24期(1970/昭和45年)

往時茫々

会員 小野瀬 有 (24期)

24期の修習生は、前期を紀尾井町の研修所で受け、後期を旧岩崎邸の敷地にできた湯島で受けた。この点で、2つの研修所を経験した唯一の期である。以来、かれこれ50年近くになり、まさに往時茫々の感があるが、年を経るほど思い出がよみがえってくる。

実務修習地は、国内短期留学のつもりで京都を選んだ。端的に言えば、短期遊学というのが本音である。

最初の実務修習は、弁護修習から始まった。京都の特色として、2人の弁護士について指導を受けたが、担当になった1人は、北白川の自宅を事務所として半ば引退した弁護士であったので、出廷のない時以外は、裁判所と道路ひとつ挟んだ所にある坪野法律事務所において、後に京都弁護士会の会長となった坪野弁護士のもとで指導を受けた。

同事務所の特色としては、企業法務よりも市井の人や働く人の弁護をすることに重点があり、この人たちに寄り添った活動をすることを身近に体験できたことは、その後の法曹としての原点となっている。本来の修習以外にも、同弁護士にはひんぱんにご自宅で食事をいただき、京都市内の名の知れた飲食店に連れて行っていただいた。

弁護修習における行事として、12月恒例の南座顔見世歌舞伎を造詣の深い弁護士の案内により観劇した。初めての歌舞伎であったが、これに触発されて、以来50年近くにわたる趣味となっている。

次の検察修習は、座学と取り調べ、法廷立会とあるなかで、当時、修習生が検面調書を作成することの是非が論議されていた。比較的軽易な事件の在宅の被疑者に対する取り調べをしたが、取り調べのまねごとのようなもので、とうていそのまま検面調書に

なりうるものではなかったので、その議論の対象外であった。

検察修習で特に印象に残るのは、修習生に対する厚遇である。修習生のために特別にグリーン車を一輛連結して、形ばかりの福知山の操作場を見学した後、天の橋立への一泊旅行、一般には予約制の修学院離宮や桂離宮の見学、雪の三千院への参拝などである。京都にいればこそといえるものかもしれないが、このような厚遇は、任官予定者のみにとどまらず、法曹の選良の意識を醸成させるものではないかと思ったものである。

裁判修習は、民事・刑事の順で受けたが、その頃、裁判官は両部とも週の半分は宅調日としていたので、修習生もおのずから裁判官の出勤する日だけ登庁し、それ以外は自由時間であった。

京大法学部を出て、芥川賞を受賞したある作家が、京都は寺社仏閣ばかりで若者が行くところはあまりないので、遊ぶことよりも読書に集中できたと書いている。私の場合は、この逆で、京都に来訪した多くの友人たちを案内しては寺社仏閣めぐりをしたものである。また、裁判官の有志が習っていた小料理店での謡曲のおさらい会を見学させていただき、その後の会食もともにした。

前期と後期の研修は7組であったが、仲のよいクラスであり、今でも毎年、旅行会を催し、各地の名所や温泉を訪ね、旧交を温めている。

修習の2年間は、いわばモラトリアムのようなものであったが、逆に、そのことがその後の長い法曹としての活動の原動力と業務外の日常生活の糧となっているように思っている。